



HAL
open science

書評 **Obrillant Damus** (オブリヨン・ダミュス) 著『ハイチにおけるレイプ-性犯罪への心理学的・社会的アプローチ』

Sunami Inoue

► **To cite this version:**

Sunami Inoue. 書評 **Obrillant Damus** (オブリヨン・ダミュス) 著『ハイチにおけるレイプ-性犯罪への心理学的・社会的アプローチ』. Espace des femmes = Josei kukan (Centre de Documentation Franco-Japonais sur les Femmes), 2020. <hal-03085267>

HAL Id: hal-03085267

<https://hal.science/hal-03085267>

Submitted on 21 Dec 2020

HAL is a multi-disciplinary open access archive for the deposit and dissemination of scientific research documents, whether they are published or not. The documents may come from teaching and research institutions in France or abroad, or from public or private research centers.

L'archive ouverte pluridisciplinaire HAL, est destinée au dépôt et à la diffusion de documents scientifiques de niveau recherche, publiés ou non, émanant des établissements d'enseignement et de recherche français ou étrangers, des laboratoires publics ou privés.

Obrillant Damus (オブリヨン・ダミュス) 著
『ハイチにおけるレイプ
—性犯罪への心理学的・社会的アプローチ』

(L'Harmattan, 2018)

井上 須波
INOUE, Sunami

本書はハイチで大きな社会問題となっている女性に対するレイプを扱っている。貧困と政治的社会的混乱が長く続き治安が不安定であることに加え、男性優位主義の社会文化にあって、子どもから成人まであらゆる年齢の女性がレイプ被害（集団レイプを含む）に遭う危険にさらされている。しかも凶器や銃を用いた暴力的な犯罪である場合が多い。著者は、ハイチの若者にとってレイプは「男らしさ」への一種の入門的儀式であると述べている。レイプは男性特有の暴力的儀式¹であり、ハイチでは恒常的な社会的病だと指摘している。他方、レイプが被害者にもたらす心理的影響について、主にフランス語圏と英語圏の社会心理学・精神病理学の分野の研究を引用して分析を行っている。著者は本書を通してレイプを訴えるとともに、社会の偏見やタブーが性被害を公に語ることを困難にしていると鋭く批判している。

著者オブリヨン・ダミュス氏はキスクヤ大学の教育科学学部、ハイチ大学の社会科学高等教育研究所で教鞭を取る若手の研究者である。研究分野はハンディキャップ、人間のバルネラビリティ、助産婦による助産行為とケア、誕生の儀式、授乳の儀式、土着の知、レイプ、ハイチ・クレオール語とフランス語との関係、癌と絆の関わり、など多岐に渡る。ダミュス氏は世界で最も貧しい国の一つであるハイチで生きる人々の知恵、生活や社会問題に鋭いまなざしを注ぎ、特に女性、病人、障害者などの社会的弱者の地位向上に向けて自身の研究で主題的に取り上げている。

本書は3部7章から成る。第1部では、家庭内性暴力について5人の被害者の事例を通して分析が行われる。被害女性の証言に多くのページが割かれている。読者は被害者の内面に迫り、被害者の目線からレイプとは何かを理解することができるだろう。第2部は著者がレイプ被害者のための支援団体で出会った被害女性30名とのインタビューに基づき、ハイチで社会問題となっている見知らぬ者によるレイプの実態や被害者のトラウマについて、文献を引用しながら精緻な分析が行われている。第3部では服役中の加害男性20名の言説から、彼らを性犯罪へと導いた社会的要因について分析・

¹ 社会学・人類学の分野では、若者のリスクテイキング行動（自分のいのちや健康を危険な状態に陥れる行為を指し、例えば挑発、自殺未遂、麻薬中毒、摂食障害、スピード違反、暴行などが挙げられる）が現代における「儀式」の一つのあり方と捉えられている（Jeffrey et al. 2005）。ここで言う「儀式」とは、伝統的社会において若者が大人の世界へ入門する際の通過儀礼に相当する。伝統・伝承に基づく通過儀礼が失われた現代において、大多数の若者は大きな問題なく社会へ統合していく一方、少数派ではあるが人生の意味や将来の展望を持つことができない若者が存在する。家庭や社会での位置づけなどに問題を抱える後者の若者は、大人としてのアイデンティティを確立するために自己や他者に対して「暴力」で応える以外の方法を持たない（Le Breton 2005, p. 17）。つまり、暴力が儀式的な意味合いを持つのである。著者はレイプを若者、そして男性特有の暴力的儀式と呼ぶことで、ハイチにおける男性アイデンティティのあり方や社会構造との関連を示しているのである。

考察を行っている。

第1章で著者は、ルート、レオニーズ、マタ、エリアヌ、レネットという5人の家庭内性暴力の被害者にインタビューを行い、レイプが起きた時の状況、レイプ中及びレイプ後の加害者と被害者の行動、レイプがその後の人生にもたらす影響について語り、説明するよう求めている²。5人は6歳から15歳までの間に従兄弟、叔父、養父などから人生で最初のレイプ被害に遭っている。一人の加害者から繰り返し性暴力を受けた例もあれば、後に友人や恋人など別の男性から被害に遭った例もある。幼少期のレイプは、被害に遭った女兒がレイプであると認識することができず、その後の性的発達や友人関係、恋愛関係に混乱をもたらす。例えば、軽率な性行為を行う、性的嫌がらせ（セクハラ）に遭いやすい、男児・男性を避ける、或いは反対に男性恐怖を乗り越えるために多くの関係を持つ、等である³。性犯罪が身内の間で起こる場合、被害女兒が家庭内で他の子どもと同等に扱われないなどの虐待、保護者（実の親とは限らない）との不和なども影響している⁴。加害者は、女兒の身近に頼りにできる大人や被害を打ち明けられる者がいないことを見抜いて犯行に及んでいる。あるいは、女兒や親の篤い信頼を利用して犯罪を犯した例も見られた。親や周囲の大人がレイプの事実を知っても、事件が近所や社会に知れ渡りスキャンダルになることを恐れ、被害女兒に沈黙を強いる事例がしばしば見られた。沈黙は加害者を擁護することにつながる。著者は、周囲の無理解や沈黙は被害者のトラウマをさらに大きくし、性暴力の二次被害の要因の一つであると述べている。

5人は、インタビュー当時20代・30代であったが、今なお様々な心的外傷後ストレス障害を抱えている。著者は対話型面談が被害者にポジティブな効果をもたらすと指摘している。例えば、レネットはインタビュー後、まるで重荷を下ろしたかのように穏やかな気持ちになったと述べている。ナラティブ（語り）研究の分野では、研究（recherche）、介入（intervention）、教育（formation）の3つの目的で「語り」が用いられる（Desmarais & Pilon 1996）。著者はインタビューを通してレイプ被害者のもとでソーシャルワーク型の研究を行うと同時に、被害者がライフストーリーによって自己の再構築を行うという自己形成（autoformation）の場をも創り出している。レイプはタブー視されがちなテーマであるだけに、語りを用いた研究が社会と個人（被害者）にもたらす作用も大きいと思われる。なお、被害者の自己再構築は、第2部で主題として取り上げられている。

第2部では、著者が2013年から2014年にかけてレイプ被害者のための支援団体で出会った被害女

² この5人は大学で高等教育を受けた高学歴の女性であり、語彙が豊富で、自己を分析し理論化する能力が高いと指摘されている。被害女性の中には事件を乗り越えるために学業や仕事に打ちこんだり、自身の性被害経験を通してレイプとは何かを理解するために研究者になる者もいる（例えば、Poirier-Courbet 2015）。しかし、レイプによって生じる恐怖や様々な感情、行動障害に打ち勝てずにいる女性もたくさんいる。著者は、「レイプに遭った女性の人生は剥奪されたようなものである」と述べている。

³ 日本でも、例えば児童相談所保健師の榎原は「性被害児の多くは、自尊感情の低下や無力感、孤立感、恥や罪の意識、性の健康発達が阻害される等の心理的問題を有している。また、性的トラウマの再現により無意識のうちに性的な挑発を他者に向けて、性被害を呼び込むことや、受けた被害を他者に向けての性加害行為が生じやすいことが指摘されている」（榎原 2014, p. 38）とし、再被害の防止を目的とした、自分の体と心を大切にできるようなプログラムの開発が急がれると述べている（同上）。

⁴ 家庭問題や親との不和が原因で少女が家出をし、歓楽街でレイプや売春などの被害に遭ったり、さらには覚せい剤使用などの非行に至るケースが日本でも知られている（岩井 2015）。中谷の『女性犯罪』（1987）によると、1984年に少年鑑別所に入所した非行女子の94.7パーセントが性交渉を経験しており、その内約20パーセントは初体験がレイプ、集団レイプ、売春など性被害的なものであった。このことは、性被害の経験が非行などの犯罪的行為へと向かわせる一要因となっている可能性を示している。

性 30 名及び服役中の加害者 20 名とのインタビューを通して、次の 3 点が明らかにされている。レイプが被害女性のアイデンティティに及ぼす影響、被害者がレイプ中とレイプ後に経験する感情、被害者がトラウマを乗り越えるプロセスである。著者はファン・ヘネップの通過儀礼の理論における分離、過渡、統合に則って、被害者のアイデンティティの変遷を捉えている⁵。「レイプの被害者となってしまった女性は、以前の状態に戻ることはできず、一度もレイプされたことのない女性と一線を画すことになる」とレイプの破壊的な作用を指摘し、被害者の心理・社会・経済面に及ぼす影響を細かに分析しつつ、「被害女性がレイプのもたらす衝撃的な結果にもかかわらず、人生に意義を見出し自己を再構築することは可能である」と結論付けている。

インタビューに協力した被害者の多くは貧困層の出身であった。キャンプ・スラムといった居住環境、路上での売子のような労働環境、識字率の低さに見られる教育水準などの問題がレイプ被害に遭う危険性を高めている。暴行、暴言、刃物や銃で脅すなどは、見知らぬ者によるレイプの一般的特徴だという。30 万人を超える死者を出した 2010 年のハイチ地震の後、これら見ず知らずの者によるレイプが避難所のキャンプなどで多発したと著者は言及している⁶。ハイチではカトリックやプロテスタントの教会や支援団体が被害女性の自己再構築と社会復帰に重要な役割を果たしている。

第 3 部は投獄中の加害男性の言説分析に充てられている。ハイチでは、レイプを犯す男性のプロフィールは二つに大別される。医者のように被害女性に対して社会階級的に権威的立場にある者と、十分な教育を受けていない貧困層の者である。性犯罪者に対する法的制裁は十分機能しておらず、上流階級出身で富裕な犯罪者は裁判官や被害者家族などを買収して刑を逃れる一方、法に疎く簡単に自白する貧困層の者は易々と刑務所へ送られる。このような理由から、著者が刑務所で出会った犯罪者の多くは非識字で貧困層出身の少年・若者であった。

加害者とのインタビューからはレイプや性犯罪についての間違った認識が認められる。例えば、身体的暴力を伴わなければレイプではない、現行犯逮捕でなければレイプ罪で投獄されない、女性は恋人との性行為を断つてはいけなく、処女でない被害女性は加害者を告発すべきでない、等である。著者はこれらの主張の背景にはハイチ社会に根強く残る男性優位主義があるとしている。レイプを犯す男性は、女性の同意を得るという手続きを踏むことができないか、女性の不同意を受け入れることができないため、女性を辱めることで自身の優位性を誇示しようとする。暴行者にとってレイプは快楽的な面を持つ。レイプは心地の良い感覚を生み出し、自己のフラストレーションに対応することが可能になるという。著者は、レイプは愛情不足に苦しむ男性が犯す犯罪であり、彼らの自尊感情は極めて低いと述べている。

⁵ スイスの民俗学者ファン・ヘネップは通過儀礼を、個人がある状態から異なる状態へ、ある地位から異なる地位へと移行する際、その過程を助ける儀式と定義した。伝統的に、誕生、結婚、死など人生の節目に行われる儀式を指す。広義では、人生は象徴的な死と再生の繰り返しであるという認識に基づき、儀式を過去との「分離」を意味する準備期間、以前と以後のどちらにも属しない「過渡」の期間、新たな世界への「統合」という 3 つの段階から構成されるものとする (van Gennep 1981)。この理論は現代の様々な社会的現象を分析するために用いられ、本書で著者はレイプ被害者のアイデンティティの変遷に応用している。

⁶ 日本でも阪神淡路大震災、東日本大震災の際に、被災地で犯罪が増加したことが知られている。性被害については、常時でも届出の件数と実際の被害件数に大幅な隔りがある上、災害時に性犯罪が増えたことを示す統計データはない。しかし、災害という特別な状況において性犯罪が起きやすくなるという報告はなされており、実際、被災地では性被害防止の取り組みが行われている (中野 2016)。

著者は最後に、レイプや性犯罪のない社会が存在するだろうかと問うている。性的攻撃は「暴力」であり、「暴力」は人間社会に固有のものであるという。どれだけ平和に見える社会でも暴力は存在する。それを否定したり見て見ぬ振りをするのではなく、暴力性が人間の本質の一つであることを認め、予防教育に努めなければならない、というのが著者のメッセージである。家庭・学校・大学が全てのレイプを告発する社会文化を育む役割を担うこと、そして少年・男性への性教育では性衝動をコントロールできるよう援助をすることが大切だと説いている。

本書の優れた点は、著者が被害女性だけでなく加害男性にも耳を傾け、性犯罪・性被害を異なる角度から探究し提言を行っていること、また、レイプを当事者個人の問題のみならず社会問題として明確に提示したことである。勇気を持って証言を行った35名のハイチ人女性は、レイプについて社会のよりよい理解を促しただけでなく、沈黙を破ることで自己の再構築の道へと大きな一歩を踏み出したのだ。多くの優れた社会学研究が国や文化を越えた普遍性を持つように、本書はハイチという特定の社会を扱いながらも、異なる社会に属する読者が自国の性犯罪について深く再考できる内容となっているのではないだろうか。

本書では幼少期、少女期の性被害に触れながらも、子どもや未成年を直接的に研究対象としていない。しかし今日、子どもや未成年に対する性犯罪の重大性が増していることから、ハイチ社会の実態や取り組みについての言及がないのは残念であった。また、貧困層出身で十分な教育を受けていない加害者と富裕で社会的地位の高い犯罪人の法の前の不平等について、どのような努力・対策がなされているのかという疑問が残る。しかし、これらの不足点にもかかわらず、本書の達した高い研究的価値と社会的意義は、敬意を持って評価されるべきであろう。

引用文献

- DESMARAIS Danielle et PILON Jean-Marc (eds.). *Pratiques des histoires de vie : Au carrefour de la formation, de la recherche et de l'intervention*. Paris: L' Harmattan. 1996.
- JEFFREY Denis, LE BRETON David et LÉVY Joseph Josy (eds.). *Jeunesse à risque, rite et passage*. Québec: Les Presses de l'Université Laval. 2005.
- LE BRETON David "Approche anthropologique des conduites à risque des jeunes". In *Jeunesse à risque, rite et passage*. Québec: Les Presses de l'Université Laval. pp. 17-34. 2005.
- POIRIER-COURBET Lise. *Vivre après un viol : Chemins de reconstruction*. Toulouse: Éditions érès. 2015.
- VAN GENNEP Arnold. *Les rites de passage*. Paris: Éditions A. & J. Picard. 1981.
- 岩井宜子「少年矯正と女子非行（課題研究 少年非行と非行少年処遇の過去・現在・未来）」『犯罪社会学研究』40号、2015年、pp. 27-38。
- 榊原文「児童相談所保健師が行う『性被害児のための性教育プログラム』の作成と評価」『島根大学医学部紀要』37号、2014年、pp. 37-49。
- 中谷瑾子『女性犯罪』立花書房、1987年。
- 中野宏美「災害時の性暴力とは～見えないリスクを可視化する～」日本自治体危機管理学会主催第10回研究大会分科会Ⅳ「大規模災害時の女性・男性の困難とニーズ」明治大学、2016年。特定非営利活動法人しあわせなみだウェブサイト<http://shiawasenamida.org/?mid=summary_2016>（最終閲覧日2020年9月27日）